

生きて働く力を育む授業づくり～「教科等横断的」な視点とは～ 教育講演会まとめ

- ◆ 子どもは学び続ける主体者。学校を卒業後も「学んで楽しいな。」と思えるように。
- ◆ これからの時代、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して問題を解決していく力が必要。
- ◆ 内容が理解できたかを重視する指導 → 活用に重きを置く指導へ転換する。
- ◆ 大笹生支援学校の子どもたちにどのような力を育てていくか、目的・目標を達成するために組織した計画が「教育課程」。

どのような力をつけると 社会で(生涯) この授業ではどのように位置づけられているか
生きて働く力になるか → 説明できることが求められている。

小→中→高 の学びを見通して指導することも重要。

例「買い物に行こう」生活単元学習(各教科を合わせた指導)

生活科・算数科・国語科を合わせてやっています。だから教科横断的な指導をしています。これだけでは不十分です。

そこで育まれる資質・能力をどのように意識して、それを合わせて指導しているかを説明できるように。

生活単元学習≠教科等横断的



お金(買い物)の学習 算数科と生活科を例に考えてみよう

小学部3段階の児童をイメージすると

算数科

内容の取り扱いについての配慮事項

A数と計算

児童の数理解に配慮し、生活科との関連を図りながら、金銭処理に関する指導を行う。

- 千円札1枚で買うことや百円硬貨1枚で買うこと。(金種、貨幣の価値の理解)
- 何枚かの百円硬貨で買えない時にもう1枚出して買うこと。(同等、多少の理解があれば同じ硬貨をもう1枚出す)
- 各桁に対応する数字 374円(百円硬貨を3枚、十円硬貨を7枚、一円硬貨を4枚)用意する。
- 値段より少し大きい価値のお金を出して商品とおつりを受け取る。(大小の理解)



算数科:100までの数の理解。
(まだ大きな数の概念が十分に育っていない。)

生活科 ク 金銭の扱い

- お金の価値を理解する。無駄使いをしないなど
- 金銭の受け渡しのみならず、人とのやりとり「いくらですか」「〇個ください」などの必要な言葉を使う
- おつりやレシートの取扱い、値札を見て買い物する
- 簡単なおつりのある買い物ができる



中学部の職業・家庭科につながっていく。

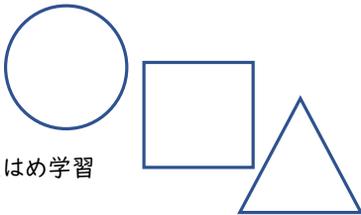
算数としての資質・能力
生活科としての資質・能力

を意識してすすめると授業のデザインが変わってくるだろう。

形の学習（算数）は、文字の学習（国語）にもつながっていく。

算数科 小学部I段階 C図形

上下や前後、形の違いに気付く
同じ形を捉えたり、形の違いを捉える



例：型はめ学習

書字のベースとなる力



〔見る力〕

- 眼球運動（視線を固定する、正確に移動させる力）
- 視覚認知（見ているものの形、位置や方向を理解する力）
- 目と手の協応（目で捉えた形や位置の情報と手や形を連動させる力）

ほかに、、、
音の弁別（聞く力）、
ワーキングメモリ（覚える力）
正しく姿勢を保持する力
なども必要。

（参考 特別支援教育の知恵袋書字編
滋賀県総合教育センター：研修部補足）

作業学習
木工班で電動ドライバーをうまく使えない…。
なぜ？

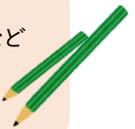
背景要因
力のコントロールが難しい。



→→自立活動で
力の方向や力の加減を学習する。

自立活動も各教科等と密接な関連を保つ。

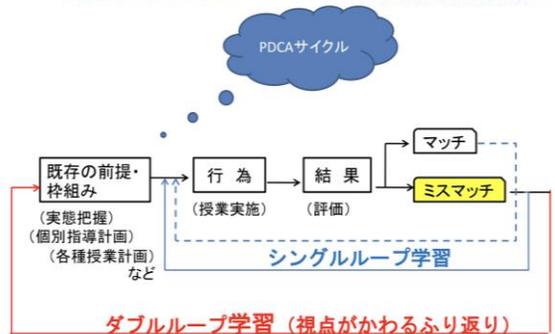
算数科 用語の理解「大きい」「長い」など
国語科との関連。



形成的評価

日々の子どもの姿から（記録・映像などから）省察し、実態把握や設定された指導目標・指導内容の修正を行う。

「シングルループ学習」と「ダブルループ学習」
＜技術的熟達者＞ ＜省察的实践家＞



(Argyris C 1999)※一部改変

